



第3回 阪神間少年・森繁久彌 生誕 100 年記念

講師 河内厚郎 (文化プロデューサー)
小西巧治 (西宮芦屋研究所員)

流れに長い三尺幅の板のかけ橋があって、これが僅かに鳴尾と西宮をつなぐ道でもあったのである。川の土堤は、老松姿よく海につながり、時折厭世の男女の首つりに利用されていたのである。幼年の私達は、首つりをおそれながらも松林の裾の竹やぶに陣地をつくり、戦争ゴッコをしたり、春の目ざめのママゴトもしたのである。川中島では甲陽中学の悪童たちと喧嘩もしたし、まければ板橋をこわして逃げるゲリラもすでに少年たちは心得ていたのであった。

川の真中に甲子園停留所が出来たのはずっとあとのこと、鉄橋東側の林の中には避病院があり、そのすぐ横に私たちの幼稚園があったのである。青松の端に白砂の浜につながり、その海はあくまで碧く、いわし網のロクロについて廻れば、バケツ一杯のイワシを気さくに呉れた漁師たちであった。こうじの香りのほのかにたゞよう西宮の酒倉の暗い細い

露地を、阪東妻三郎や大河内伝次郎が三尺を抜いて、寄らば切るぞと走ったのである。

そして、そんなロケーションは必ず西宮の由緒深い港に建つ古色蒼然たる障子の入った黒い板の燈台を撮影して行ったことを覚えている。たゞ、二本の高い煙突のあった今津の火力発電所だけが近代を見せている以外、全くの田舎であったことは事実である。——あの当時の姿を今は誰と誰とが記憶にとどめているだらうかと時折思う私だ。

これが、云はゞグチっばい西宮に憶う私の今昔であるが、その鳴尾村字西畑から、あの東大の梶原投手が生れ、横商の塩見ピッチャーや、詩人サトウハチローや、役者の私が生れたのである。甲子園名物男の長さんはのどかに八百屋の車を曳いていたし、又時折り——私の祖父と碁をうつために同級生の瀬川少年が、有名な碁の大家になるとも見せず、鳴尾からハカマをはいて現われていたのである。

2014年 7月27日(日)
なるお会館

主催：(公財)西宮市文化振興財団

阪神間少年 森繁久彌 年表

作成：西宮芦屋研究所

年	出来事	資料・備考
明治43年(1910年)	鳴尾西畑文化村完成	
大正2年(1913年)	枚方市で生まれる 3人兄弟の末っ子 父、菅沼達吉(大阪電燈常務)母、馬詰愛江	
大正4年(1915年)	2歳の時、父親死去	
大正6年(1917年)	鳴尾へ転居 枝川保育園入園 枝川保育園(大正6年10月より大正9年3月25日 日まで保育したことを証す)菅沼久彌名	保育證書
大正9年(1920年)	武庫郡鳴尾村立 鳴尾尋常小学校入学 森繁姓(母方の祖父の姓)を継ぐ	1年生
大正10年(1921年)		2年生
大正11年(1922年)	第2学年 成績優等の賞状 菅沼久彌名 大正11年3月26日 武庫郡鳴尾村立 鳴尾尋常 小学校	3年生 鳴尾小学校賞状
大正12年(1923年)	関東大震災 佐藤愛子生れる	4年生
大正13年(1924年)	甲子園球場完成	5年生
大正14年(1925年)	堂島尋常高等小学校へ転入	6年生
大正15年(1926年)	大阪府立北野中学入学	中学1年生 その後今津へ転居
昭和9年(1934年)	早稲田第一高等学院から早稲田大学商学部へ	
昭和28年(1953年)	西宮北口撮影所で宝塚映画『喧嘩駕籠』に出演	わが青春の宝塚映画
昭和34年(1959年)	「森繁劇団」結成	
昭和36年(1961年)	西宮市勢要覧に「西宮今昔」を寄稿	48歳
昭和39年(1964年)	大型外洋帆船、ふじや丸が完成、横浜～西宮間 の初航海、西宮に繫留 遭難しかける	アッパさん船長
昭和48年(1973年)	鳴尾小学校創立100年記念誌へ「ああ鳴尾小」寄 稿	60歳
昭和50年(1975年 頃)	枝川幼稚園(保育園)卒園生の「苺会」森繁邸で 開催 後に「鳴尾会」となる	鳴尾村誌
昭和57年(1982年)	日本文芸大賞特別賞受賞	
平成3年(1991年)	文化勲章受章	
平成5年(1993年)	鳴尾小学校創立120年記念 自筆の書寄贈	80歳
平成14年(2002年)	鳴尾村誌巻頭インタビュー「森繁久彌が語る わ が追憶の鳴尾村」	
平成21年(2009年)	死去 国民栄誉賞を授与	享年96歳

森繁久彌「西宮今昔」

1961年(昭和36年)

西宮市勢要覧

二十五、六年頃だったか――。

懐しの故郷をと、西宮を訪うてあちこちと一人歩きしたが、小鮎すくったあの川も小学校に通ったあの道も、あの家も、すっかり変りはてゝがっかりし
“哀しやな、我が故郷は雲にのみ”と、たった一人見付けた友に愚痴をこぼしたことがあったが、そのあとで、これはこれでいゝのだ、我が西宮があつたまゝで今も同じ変りばえもせぬ古くさい町であつては、かえって困りものだと思つたことである。

最近、宝塚映画の仕事や、ヨツトのことで訪問の機会もふえたが、その度にそのめまぐるしい発展に驚き入っている次第である。寂しいと云えば寂しいが、私は大いに祝福している。

二月に、東宝劇場に「森繁劇団」の旗上げを祝つて、田島市長の来駕を受けたが、その折樂屋で、市長の十年後の構想を聞いて眼をみはつたことである。しかしそれにも、大なり小なりの邪魔や隘路がある話だったが、私と同じ様に古い西宮人は、陋習のセンチメンタリズムを捨てゝ近代都市への発展に大いに心を開くべしと悟つたのである。面白くないと拗ねるのはいゝとして、提灯をもたずともせめて不要の邪魔だては差しひかえるべきである。一日の進歩を百日も千日も遅らすことになるからである。四の五の云つても私たちの年ごろまでゝ次代の子等は、こゝが海だったのかと貝がらが校庭から出て来ても懐しがりも不思議がりもせぬ。まして昔を今にかえせとは云わぬのである。たゞその連中に少し許り昔語りを教えておくとすれば、それは次にお話しする様なことだろう。

私が最初に十五年程住んだ西畑は、鳴尾村の外れで(そのあとは久寿川のほとりである。大正五、六年頃)枝川の土手を越えてあつた百軒程の文化人らしい連中許りの特殊住宅地であつた。枝川は武庫川の支流で、こゝにマンモス甲子園球場が建つまでは鮎のすくい取りも出来た清らかな流れで、雨後の濁流以外は、川原は広い広い遊び場であつた。この



あゝ鳴尾小

同窓生 森 繁 久 弥

私が、鳴尾小学校に籍を置いたのは確か、二年生から五年生までと記憶する。一年生の時は、枚方の小学校、六年生の時は、堂島小学校に転校したからである。

ずっと平野先生に習ったわけだが、平野先生が、始終、私の家に来られたのと、生真面目な先生が、何時も、恩賜の金時計を、ポケットからそっと出して、両の掌で抱きしめるように見ておられたのが、何とも微笑ましく、甘酸っぱい思い出となって、鮮かに蘇ってくる。

私たちが住んでいた西畑という所は、当時、文化人が多かったように覚えていたが、佐藤紅緑さんの息子で、今、売り出しの佐藤愛子さんの兄、弥

とは竹馬の友だった。彼も、南の涯で戦死してしまい、いかにも残念だが、その思い出をサトウハチローさんと語り合ったことから、大詩人とも仲良くしていただけになった。弥が、引き合わせてくれたんだと思う。

ほかに、山井・豊島・天野など、仲のいいのがいたが、山井の他は、あえずにいる。

西畑はまた、たくさんの野球の選手を生んだ。一年上の梶原君は、当時の東京帝大の名ピッチャー、塩見君は、横商のピッチャー、その上に、石関さんなどがいる。



赤い紙やろか

卒業生 佐藤 愛子

そういえば、妙な遊びも流行した。あのあたり、ポプラの木が多く、やがて色づく頃、この葉っぱの茎をからみ合わせて切りっこする。茎相模である。繊維の強い葉を探すために、方々のポプラを探しまわり枝から落ちたりそれを集めて油や塩に漬けたりした。

やがて、絵のような枝川が、甲子園の建設で、だんだんとその姿を失う頃私たちがまた、この故郷から一人ずつ姿を消していったようだ。

あの松の並木道や、誰もいない真白な鳴尾の浜で、かすかな恋心をとぎめかせたこともあったようだが、思い出すにはあまりに遠すぎる。

私が鳴尾小学校に入学した春は小学校の校舎は阪神鳴尾の停留場のすぐそばの、古び黒ずんだ木造建築だった。私たちは一学期だけこの校舎に通って夏休みの間に学校は新しい校舎に移ったのだと思う。

古い校舎には僅か四か月しかいなかったのだが、その校舎の古色蒼然ぶりは今でも私の臉に残っている。殊に印象に強く残っているのは、便所と授業のたびに鐘をカランカラン鳴らす小使いさんのことである。

なぜ便所のが印象に残っているかといえは、私はこの便所が何とも怖ろしくて、どうしても行けなかったからである。その便所は別棟になっていた薄暗くいつもそこいら中が濡れている。

者だったのを、あの座敷や、庭の南天の木、松の枝ぶりといっしょに思い出す。

当時の鳴尾は、いちごの名産地、ずいぶんと盗み喰いしたのだが「とっくり」「ハイカラ」などというえい名が懐かしく、少年の日の食感として残っている。そのいちご畑を歩いてゆくと競馬場があり、馬が走り、走らない日に曲芸の飛行機が飛び、飛んだ飛行機が外人パイロットと同乗した近所の魚屋ともども田んぼに落ちた。その競馬場近く、日本最古の鳴尾のゴルフ場があった。クラスの悪童連が玉捨いにゆき、ボールをガメてきては私たちにくれたが、その頃からダンロップの名を覚えていた。あのボールの硬いゴムの表皮を、切り出してむくのは、難しいものだが、ついつい手許が狂って指を切ったりしながら、何とか中の長い長いゴム糸を取り出す。これを合わせて、模型飛行機をつくるのが何より嬉しかった。

たような気がする。友達の話では、女便所の中でしゃがんでいると、目の前におじいさんとおばあさんがご飯を食べているところが浮かんで来て、

「赤い紙やろか 白い紙やろか」

という。うっかり赤い紙おくれ、といった子がいて、そういったトタンに便所のタメ壺の中に引きずりこまれてしまった、という怖い便所である。

それで私は一度もその便所に入ったことはなかったが、そのため鳴尾小学校というとおしっこを我慢した辛さと一緒に、その陰気な便所のが何よりも先に思い出されてくるのである。私は学校が好きな子供ではなかった。私は気が小さく、ちょっとしたことにもすぐ傷ついて涙ぐんでしまう女

平成5年 創立百二十周年記念 寄贈 森繁 久弥

枝川の清き流れに鮎つかみし
うないの頃

桜の並木は遠く海まで
つづいていた
競馬場の馬は走り、時に
曲乗りの異人スミスはボロ飛
行機を馳せて鳴尾の上空
を飛んだが 高い金を拂（払）つ
て同乗した 魚屋の主は始
めて見る廣い故郷に感嘆
しながらイチゴ畑に墜落して命
はてた。

甲子の年

無残やな いとほしき川は水が止り
やがて天を摩する高層建築は成
り、人これと呼んで甲子園という 私ど
もの鳴尾を今津の川とはさんでの戦
争ゴッコも終局をつげた 松林
の幼稚園も無くなり蝶も魚も何処
へ行ったのだろう

私は菅沼久弥から森繁に変わった
新しい学校を私は知らない
でも平野先生は忘れていない
生意気な訓導でいつも恩賜の
懐中時計を見ながら甲を
つけてくれた 同級生の瀬川は
少年棋手でうちの爺さんたち
といつまでも打っていた後には九段
になり名人にもなった

一面のイチゴ畑もシーズンまでは糞尿
の匂いしきりなる乍らあれど一面に紅の
弾く頃少年たちは畑に入つて盗み
食ひして見張親爺にこっぴどく叩か
れた

何にしても心のふる里である。北野中学
に入ったが私たちはまだ鳴尾（西畑）
にいたのだ

平成五年六月

森繁久弥（八十才）

母校鳴尾小学校に贈る

